魅力ある県立高校づくりアドバイザー会議（第１回）　議事録

１　日　時　　令和６年６月４日（火）　　午後３時開会
　　午後５時終了

２　開　催　　集合型及びオンライン参加型

３　出席アドバイザー
　　益川弘如氏、澁川幸加氏、奥平博一氏、萩原裕子氏、内田ひとみ氏、
　　澤田修氏、関根弘子氏、船橋幸代氏、柿沼光夫氏、江原勝美氏、池田靖氏、
　　服部修氏、岩田輝子氏、川邉友子氏

４　事務局　　魅力ある高校づくり課

５　協議等　　今後の魅力ある県立高校づくりについて

依田高校改革統括監　それでは、議事に入ります。資料の３ページ、次第を御覧ください。１～９までございますが、この後、３について、事務局から説明があります。４～６については、適宜、皆様から御質問をいただいた上で、７で皆様から御意見を頂戴したいと考えております。そのような流れで進めさせていただきます。それでは、「３ 魅力ある県立学校づくりの方針」の改定について、事務局から説明をお願いします。

事務局　（「３「魅力ある県立学校づくりの方針」の改定について」説明）

依田高校改革統括監　今年度、県教育委員会の方で進めさせていただく、魅力ある高校づくりになりますが、事務局から概要の説明がありました。このことについて、皆様から疑問点、御質問等はございますでしょうか。よろしいでしょうか。

　それでは、次に進みます。次第４、５になります。「４ 埼玉県立高校について」、「５ 現行「魅力ある県立学校づくりの方針」での主な取組」について、御紹介させていただきます。資料２及び３になりますが、あらかじめ、皆様には御覧いただいているところですので、順に確認をしてまいりたいと思います。11 ページ、「１ 県立高校の数」、「２ 学科の設置状況」、「３ 多様なタイプの県立高校」について、御質問などはございますでしょうか。よろしいでしょうか。

　その次のページです。これは県立高校の地域や学科をまとめたものでございます。よろしいでしょうか。

　それでは資料３に移ります。現行の方針における主な取組でございます。15 ページ、「１ 学びの改革による確かな学力の育成」、「２ グローバル化に対応した教育の推進」、「３ 科学技術教育の推進」、「４ 豊かな心と健やかな体の育成」となっております。主な取組について紹介させていただいておりますが、よろしいでしょうか。

　次の 16 ページに移ります。「５ 産業構造の変化に対応する人材の育成」、「６ 再チ

ャレンジの意欲に応える教育体制の充実」、「７ 地域の新たな核となる学校づくりの推進」、「８ インクルーシブ教育システム構築に向けた特別支援教育の推進」、こういった点に触れさせていただいております。よろしいでしょうか。

17 ページでございます。これも、現行の方針における主な取組について、概要を示したものです。第５章の右側ですが、令和８年４月開校予定の新校となっております。この辺について何か御質問等がございましたら、お願いいたします。よろしいでしょうか。

続きまして、資料４に移ります。「県立高校を取り巻く環境について」ということです。皆様からアドバイスをいただきながら魅力ある高校をつくっていくという、私どもの基礎になる、取り巻く環境ということになります。県教育委員会として、こういう環境について認識しながら、今後、魅力ある高校づくりを進めていこうという、これからの話になります。ですので、皆様と認識を一致させながら進めてまいりたいと思います。

まず、19 ページの「１ 中学校卒業者数の減少」でございます。グラフを見ていただければ現状はお分かりになるかと思いますが、皆様から何かございますでしょうか。事務局から説明はありますか。

事務局　グラフのとおりでございます。公立中学校卒業者数の減少が加速していくことを踏まえ、各校が活性化・特色化を図っていく中で、高校教育の質の維持・向上を図ってまいりたいと考えているところでございます。

依田高校改革統括監　減少が令和９年３月にガクンと下がって、また令和 14 年３月にまた下がっていき、そこから角度が付いてきています。このような形で中学校卒業者数が減っていくという傾向です。

その下、「２ 新たな社会への進展」です。様々な社会課題があるということでございます。よろしいでしょうか。

それでは、次のページに進みます。20 ページ「３ 生徒の多様化」でございます。グラフを御覧いただき、何かありましたらお願いいたします。よろしいでしょうか。この辺については、全国的な傾向ということもあるのでしょうが、本県においても、不登校児童・生徒数は御覧のような状況になっております。また、日本語指導が必要な児童・生徒数も、御覧のように右肩上がりとなっております。

その下、「４ 高校生の進路」です。普通科と農業科、工業科、商業科における進路状況を示しております。青線が大学等進学、灰色が就職、オレンジが専修学校進学、黄色がその他となっております。御覧のような傾向となっておりますが、事務局から何かありますか。

事務局　グラフのとおりと認識しております。引き続き、一人一人の進路希望に応じた学校の対応が求められるということかと思っております。

依田高校改革統括監　それでは次のページにまいります。「５ 教職員を取り巻く状況の変化」ということで、こちらもグラフを見ていただけると、志願者数については右肩下がりという状況でございます。御質問等、よろしいでしょうか。

「６ 地域と家庭の状況の変化」、「７ 児童・生徒の意識」については、グラフはございません。７については、県教育委員会でアンケートを実施しておりますので、そ

のアンケートの内容についてはこの後、事務局から説明をお願いしたいと思いますが、６、７について、何かございますでしょうか。よろしいでしょうか。それでは、アンケートの方に移りたいと思います。事務局から内容について説明をお願いします。

事務局　（「参考資料⑦県立高校の特色化に向けたアンケート結果について」説明）

依田高校改革統括監　比較的大規模なアンケートを実施した結果の説明でございます。お時間のある際に御覧いただければと思いますが、今の説明も含め、アンケートについて、御質問、御意見等がありましたらお願いいたします。よろしいでしょうか。

　それでは、引き続き議事を進めさせていただきます。私どもが用意した資料については、お目通しいただいたところでございます。ここからは、アドバイザーの皆様から、御挨拶を含め、皆様の御専門もお伺いさせていただきながら、お話をいただければと考えております。冒頭の御紹介の順にお願いできればと思います。それでは、益川様、よろしくお願いいたします。

益川氏　青山学院大学の益川です。今年度から所属が変わりました。認知科学、学習科学を専門としております。人がうまく学ぶことができる条件というものがあります。そういったことをベースにした授業づくりや、生徒たちの資質・能力をいかに育んでいくのかといったことを、先生と一緒に研究しております。今回、魅力ある県立高校づくりのアドバイザーとして関わらせていただくことになり、埼玉県とはいろいろな形で、小・中学校、高等学校、教育センターなど、関わらせていただいておりますので、その現状も踏まえながらコメントできればと思っております。

　まず、アンケート結果を見て感じたことですが、やはり子供たちの未来を見据えた思考をされる保護者が多いのかと思いました。特に、総合高校のような、様々な領域の内容を学びたいということを望んでいたり、それは小・中学生も多いのですが、そういう方向性も大事なのかと思いました。

　昨年度までは聖心女子大学に勤めていましたが、埼玉県の県立高校出身の教え子から聞いても、総合高校では多様な教科を学べてすごく良かったと言っていました。今年の春から、中学校の社会科の先生になっています。その話を聞いていると、単位の選択制となってくると、先生方がたくさんいないと難しいという現状があります。それで、埼玉県内でもそんなに総合学科の高校の数が多くないという現状かと思います。そういったことを考えていったときに、魅力ある高校づくり、先生方自身の魅力を上げていく必要があるのと同時に、一つの高校に一人の先生という従来の枠組みだけでなく、例えば、専門性の高い先生の授業を、ネットワークを使いながら、他の高校に所属している生徒も学んでいけるような、先生方の人材と子供たちのニーズを何か上手く合わせられるような仕組みづくりが大事なのかとアンケートを見て思いました。生徒数が少なくなっている中で、でも保護者は通学の利便性を大事にしているという、単純には解決できないところを、うまくＩＣＴを活用しながらカバーしていくということが大事なのかと思いました。

　また、ＡＩなどいろいろ新しい事柄を学んでいくことはとても大事だと思うのですが、そういうことを重視していくと、いわゆるこれまでの教科と新しい領域とを分断的に扱っていくと純増になってしまい、生徒の履修も大変になりますし、それだけ先生方のマンパワーも必要になってくるということもあります。そういった中で、教科

というもの自体がいらなくなるわけではないと思いますので、上手く新しいものを入れると同時に、教科の方も、例えば私はCoREFの理事もさせていただいておりますが、教科の授業改善を進めながら、これまでの教科の中でも課題や学習活動を工夫して問題解決能力やこの先必要な創造的な力など様々な資質・能力を育みながら、少し効率化した時間を、新しい領域を学んでいけるような大きな枠組みが作られていくと、生徒にとっても魅力が高まり、先生にとっても働き甲斐のある職場になっていくと思いました。以上です。

依田高校改革統括監　ありがとうございました。それでは、澁川様、よろしくお願いいたします。

澁川氏　中央大学文学部の澁川と申します。所属は文学部教育学専攻と、教育力研究開発機構というところで、大学教育について研究してきました。これまでは、反転授業の授業方法についての研究やハイブリット型授業、ブレンディッドラーニングのように、オンラインでの学びと対面での学びをどう上手く融合していくことができるのかということに大変関心を持って研究を進めてきました。最近では、対面で集まる価値を高めていきたいということを常に思っておりまして、その関心が転じて、通信制高校や通信制大学へと幅を広げて研究しております。今回、資料の中にありました、ＩＣＴを活用していく、ＤＸといったところに絡めて、少し感じたことを発言できればと思っております。

一つは、不登校児童・生徒数の増加について。全国的にかなり苦心されているところかと思います。高校における遠隔授業等の取扱いについて、不登校生徒を対象に、全日制、定時制で積極的に活用していけるように制度が変わりましたが、個人的にはそういった事例を積極的に活用していく高校が増えていけば良いと感じています。様々な生徒を取りこぼさないように、良い意味で、遠隔を使えば良いのではないかと思っております。

もう一つは、現状の高校における遠隔授業の難しさとして、法令の関係上、原則、同時双方向型の遠隔授業しか実施できないという点が挙げられます。高校では、大学のオンデマンド型授業と同じような方法で単位を出すことが原則できないという制度上の障害があることは間違いないのですが、もし可能であれば、部分的にでも構わないので、もう少しオンデマンド型の教材を活用することで単位認定ができるような先進的な仕組みができないかと考えております。その理由の一つは、先ほど、益川先生からも御発言がありましたが、教員数が減っているというところと、より一層探究的な活動や探究的な学習が求められているというところで、先生方の負担感を軽減するためにも、繰り返し学び完全習得するために使えるパッケージは積極的に使って、それを積極的に評価の観点に盛り込む。単位として認めていくことができるといった建て付けができると、生徒にとっても、オンデマンド型教材を使うインセンティブが補助的に使う場合よりも高まるのではないかというのが一つです。また、オンデマンド教材の活用可能性として、外国にルーツのある生徒への配慮というところにも関心があります。後ほど、もしよろしければ情報等をいただければうれしいのですが、様々な国にルーツのある生徒がいるものの、必ずしもその生徒の母語での指導に長けた先生を確保することができないという学校もあるのではないかと推察しております。埼

玉県の方でも多言語で教材を提供されていることをＨＰから確認しましたが、他の企業等を含めて、より外国にルーツのある生徒への教育の質保証という点から、オンラインを活用できる方法があれば積極的に取り入れていけたら、教育の質をより保証していくことにつながるのではないかと思っているところです。以上です。

依田高校改革統括監　ありがとうございました。続きまして、角川ドワンゴ学園専務理事・Ｎ高等学校長　奥平様、よろしくお願いいたします。

奥平氏　奥平博一です。本来はそちらにお伺いしたかったのですが、本日は沖縄県で行事がありまして、うるま市から参加させていただいております。Ｎ高校は 2016 年に開校しまして、2021 年には、茨城県つくば市にも第２校目となるＳ高校をつくりまして、現在、両校合わせて約３万人の高校生が在籍しております。オンラインを中心とする学校でございます。その他、いわゆる通学コースのキャンパスが全国に 69 あります。

益川先生、澁川先生の後に、私はリアルな現場しか知りませんのでなかなかお話ができないかもしれませんが、魅力ある県立学校づくりの方針も事前に読ませていただきました。その中で私が気になるのは、やはりオンラインの教育というものと、それに伴うと言いますか、実は余り表立って出てこない、いわゆる教職員を取り巻く状況の変化。先ほど益川先生も負担という点をおっしゃっていたかもしれませんが、教員の働き方の問題は、やはり避けては通れないのではないかと思っております。その中で、我々のような私立の学校のように、思い切った施策が取れない公立校としての役割というものも、今回の方針改定には忘れてはならないものかと思います。この辺りは澁川先生の御専門かと思いますが、学校という建物で学ぶことの意義は、今の時代、何なのか。何があるのかということをもう一度見直す、考え直す時期だと思っています。ただし、我々のような私立ではなく、公教育としてしっかりと担保しなければならないものがあるということも背景にはあると思います。やはり、私立と公立では立ち位置が違いますので、この辺りが公立校について考える際には一番難しい問題かと思っております。

整理しますと、やはり公立高校は、場所としての役割をもう一度考え直すときに来ているのではないか。そして、充実した教育コンテンツを提供する。場所を確保して、益川先生がおっしゃったように人も確保してというのは、相反する、矛盾することです。しかし、充実した教育コンテンツの提供というのを同時にしなければならない。先ほど総合学科の話も出ましたが、そうすると、やはり教員の負担増は避けて通れない。これを、我々は一つの解決策として、オンラインを最大限活用しているということです。オンラインによって、場所というものの役割が再活性化する。それと、どの場所においても充実した教育コンテンツを提供できる。そして、教員の負担軽減も図れる。これは一つの方策ですが、やはりオンラインの活用というものを、制度化の中では難しいかもしれませんが、検討していただきたいと思います。オンラインの活用となると、実は対生徒向けの話が本当によく出てきます。しかし、実は我々が大事にしているのは、教職員向けの業務の負担軽減です。このために、最大限オンラインやＩＣＴのシステムを活用しております。例えば、私は今、校長室から参加しておりますが、私の部屋にはほとんど書類がないと言い切って良いです。パソコンの中に全てデータ化されています。それによって、各キャンパスが結ばれています。是非、先生

方の負担軽減と同時に教育コンテンツの充実、場所の確保。そのためには先生方の負担軽減が背景にしっかりあると思いますので、この辺りも同時に解決していっていただければと思います。資料を読ませていただきますと、既に埼玉県では理数科のネットワークなど、実践的なことをされていると思いますので、今、試験的にやられていることを、最大限広げていく、全高校に導入していく。どの高校でもどの高校の主要な講座が受けられるというくらい、オンラインを活用して、実際のリアルな場とオンラインのハイブリットな高校というものを、少し検討されてはいかがかと思います。日本の場合は履修主義ですので、なかなかオンデマンドで配信というのは難しいところがあるかもしれませんが、この辺りも検討いただけたらと思います。以上です。

依田高校改革統括監　ありがとうございます。それでは、引き続き、御意見をいただいてまいります。ＦＵＴＵＲＥ ＤＥＳＩＧＮ 副代表　萩原様、よろしくお願いいたします。

萩原氏　よろしくお願いします。萩原と申します。私は皆さんと全然立場が違って、少し場違いな感じがしますが、私は、平日の昼間に、学校に行っていない子供たち、学校外で育つ子供たちが集まる居場所を開いています。一つはレクを中心としたコドモギルトという活動をしておりますが、もう一つは地域の農家に子供たちが弟子入りする形で、１年間を通して子供たちが野菜を育てて、それを収穫して地域のマルシェで販売したり自分たちで調理して食べたりといったコドモ農業大学という活動をしています。なぜ私がここに呼ばれたのかということを、お声掛けいただいたときから疑問に感じていましたが、恐らく、そういった学校に行っていない子供たち側の意見とかそういうものも取り入れていっていただけるのかなという気持ちで参加しております。

　皆さんがお話されているような難しいことは分かりませんが、学校に行っていない子供たちとずっと接していまして、学校に行っていないということで支援の対象になったり心配されたりすることが多いのですが、本当に能力の高い素晴らしい子供たちが多いと感じています。学校から離れているので学校の仕組みについては詳しくありませんが、学校に通っている子供たちは本当に忙しくて、大学受験を目標に、本当に多忙な日々を過ごしている生徒が多いなと感じます。学校の外で育っている子供たちには時間が山ほどありまして、その分、好きなことを見つける時間的余裕があるというのと、一人の時間、自分と向き合う時間も長いので、好きなことを見つける、そういうものに出会っていきます。そういった子供たちに、どんな高校が良いか、どんな大学が良いと思っているか聞いてみましたが、やはり、学校に行っていない子供たちは、高校から、あるいは大学からは学校に戻るという子供が結構多いです。そういう子供たちにとって、学校で学べるということは本当にすごく貴重な機会だと捉えています。ですので、大学受験を目標にがんばっているお子さんが多いと思いますが、やはり大学に入った後、自分の好きなことを、学校で学べる最後のチャンスだと捉えているので、学校に行っていない子供たちが言った言葉の中に、今、学校に行っている人たちはあんなに忙しいスケジュールをこなしながら、大学に入って、ようやく今から自分のやりたいことは何なのかを考えるのは本当にもったいないという言葉がありました。大学に入るまでに自分の好きなものを見つけて、やりたいことが見つかった上で大学を選んで、入ってはじめてその期間を充実させたものにできると言っていま

した。制度と言いますか、どういうふうにその時間を見出していったら良いかというところまでは私は分かりませんが、何かもう少し時間的に、心の余裕が持てると、高校に通っているお子さんたちも、何か自分の好きなものに出会えるチャンスがもっとたくさんあったら良いなと思っています。

一つの案ですが、学校の先生以外の、いろいろな分野で活躍する外部の方たちを講師にお招きして授業をやってもらって、それに先生も生徒も一緒に参加していくといったことや、最初に専門的なプログラミングなどの技術から学ぶのではなく、まずは自分のやりたいことが見つかるようなきっかけづくりのような授業があると良いなと思っています。子供たちは、自分の好きなことが見つかると、それに向かって必要なことを自分から探し出して、勉強していきます。それが学校の外で学んでいる子供たちの学び方です。最初に、これがやりたい、これができるようになりたいというところから、教科横断型と言うのでしょうか、どんどんいろいろな分野のことを自分で調べて学んでいくので、そういったきっかけが公立高校の中にもたくさんあると良いと思います。また、子供たちは特に校則で縛らなくても、信頼してあげれば、ものすごく力を持っていますので、もっと子供たちを信頼して、与えたものをこなすだけではなく、いろいろなことを子供たちに考えさせたり、子供たちが主体的に考えて問題解決していけるような機会が授業の中にたくさんあると良いと思っています。以上です。

依田高校改革統括監　ありがとうございます。続きまして、(株)ＨＵＧＲＥＳ 代表取締役　内田様、よろしくお願いいたします。

内田氏　内田です。よろしくお願いいたします。私の本業は人材育成会社の経営で、今現在 10 期目となります。その前は大手の人材会社におりまして、長いこと、人と企業をおつなぎする再就職支援やキャリア支援、人材開発といった領域で 20 年仕事をしてまいりました。現在は某製造業の社外役員も務めており、ダイバーシティやキャリア、コミュニケーションなどを専門にしております。萩原様のお話に今、大変共感いたしました。実社会に出る上で、高校という時期はある意味とても大事な時期だと思っております。その理由として、民間企業が非常に早いスピードで動いているということです。グローバル化は待ったなし、日本の立ち位置の変化。これからどうなっていくのだろうと思っています。社会が大きく変わる中で働く方々の意識など大きな変化があると思っています。そのような中、今回の膨大なアンケート結果には、たくさんの財産があると感じておりまして、この声を拾っていくことは非常に大切だと感じております。アンケート結果で、社会に出たときのルールやマナー、一般常識、お金に関する学びなどに高校生は興味があると回答しており、変わっていない部分もあるんだなと思った点がありました。ですので、実社会との連携といった中において、ＩＴや新しいものをどんどん取り入れることも必要だとは思いますが、対面やリアルといった社会に出る前の学校教育そのものに求められることは、学力向上だけではなく、自分の好きなこと。つまり自分は何が得意で自分の興味関心がどこにあるのかを深く探る、最後の砦が、高校教育であり高校生活なのかなとも思っております。大学では専門性が培われていくわけですが、正直、非常に優秀な方が企業に入ってから潰れてしまうというケースも散見されるのが現状です。そういったことを考えると、中学生、高校生くらいの時期に、自分は何が得意で、学力だけでなく、どういった道が世の中

にはあるのかということを、もっと知ってほしいと思います。実社会の企業との連携やいろいろな方のお話を聞く機会を作り、世の中には山ほど職業があるということに触れていただく機会を作っていただくことも重要かと思っております。また、先ほどからお話が出ていますが、先生方自身の働き方改革はどうなのか。先生たち自身が潰れてしまっては元も子もないと思います。是非、埼玉県は何を目指していきたいのかということ。現行の方針が策定された５年前から今に至るまで、何ができて何ができなかったのか。高校を再編したりするなど、いろいろやってきたと思いますが、できたこと、取りこぼしていること、もしかしたら隠れてしまっていること。そういったことをもう一度５年前から掘り起こしていくことが必要と感じた次第です。以上です。

依田高校改革統括監　ありがとうございます。それでは、続きまして、埼玉県商工会議所連合会常務理事兼事務局長　澤田様、よろしくお願いいたします。

澤田氏　埼玉県商工会議所連合会、澤田と申します。埼玉県には 16 の商工会議所がありまして、だいたい市町村に一つ、商工会議所か商工会のどちらかが設置されています。基本的には重複せず、それぞれの企業が入るとしたら、その地元にあるどちらかに会員として入るということになります。組織率はだいたい５割から６割くらいの間になっています。そして、我々連合会は、16 ある商工会議所がうまく連携が取れるようにいろいろな情報を共有したり、それから埼玉県や国のそれぞれの機関の窓口になり、そこから各会議所に連絡をして取りまとめているという役割を担っております。私自身は、３年前まで埼玉りそな銀行におりまして、現在は出向という形になっております。出向と言っても銀行に戻ることはありませんが、もともとは銀行員として 30 年間以上やってきております。今回、アドバイザーに選んでいただき、私も素人なものですから、非常に雑駁ですが意見を述べさせていただきたいと思います。

最近の企業の状況を見ていますと、昨日、財務省で法人企業統計を発表しておりまして、１～３月期の経常利益が 27 兆円、過去最高益といったように、企業の業績は良いのですが、やはり今一番課題になっているのは人手不足です。その人手不足をどう解消しようかということで、よく言われるのが女性やシニアの活躍、外国人の採用、あとは効率化のためにはＤＸを進めていかなければならないということがよく言われているところです。しかし、なかなかこういったことが進んでいかないところがあります。本日はいらしていませんが、先日、渡辺先生ではありませんが、埼玉大学ダイバーシティ推進センターの方とお話しして、女性の経営者や管理職はまだまだ少ないということでした。もしかしたら企業側の方により問題があるのかもしれませんが、もう少し積極的なキャリア教育も必要なのかという気がしております。

それと、本日の資料にもありますが、課題として、外国人の方が増えるという状況は、やはり今の労働環境から言うと待ったなしということかと思います。ですので、家庭も含めて、そういう方への対応が必要になってくるのかなと思います。また、ＤＸに関しても、これだけ必要だと言われておりながら、なかなか進んでいません。それぞれの企業の中で専門にできる人がいませんという理由が一番多いです。今は小・中・高でプログラミング学習が始まっておりますので、ＤＸができる人材はこれから増えるとは思いますが、システムに対応できる人が必要になります。また、企業の中でも売り上げを伸ばそうとすると、システムを開発する人と、実際に使う人や顧客と

コミュニケーションを取っていける人材、いわゆる文系と理系の垣根を超えるような人材も求められるのかと思います。

あと、人手不足の流れの中でよく言われるのは、生産性の向上ということです。日本は99.7%が中小企業と言われていますが、中小企業は生産性の向上が課題で、低いと言われています。この対策として、売り上げを伸ばすことも重要なファクターだと思っておりますが、今の時点で言えば、輸出を増やせば売り上げ、利益が伸びるはずなのですが、ところがなかなか輸出にチャレンジしようという会社がありません。少ないです。なぜかと言うと、やはり語学力に問題があるのでしょうし、海外との交渉など国際的なところに慣れていないのではないかとすごく感じます。ですので、そういったものを高校時代から培っていっていただければと思います。

あともう一つ言われているのが、起業家育成ということが言われておりまして、チャレンジして起業してということになると、やはり若い人の方が新しいことにどんどん取り組んでいけるということもあるので、高校生の頃から、そういった起業家精神を育成してもらえればと思います。そのためには、皆様おっしゃっていたように、専門性を持った外部人材をどんどん活用していければ良いと思います。ちなみに私自身が元々銀行員だったということもありますが、アンケートに金融教育というのがありましたが、なかなかこれまで投資というものをずっとやってこなかったということがあります。今考えれば、若いうちから投資をやっておけば生活は豊かになったかなと思っています。昔は実際の投資の種類は少なかったのですが、今は金融商品も増えていて、その中で、詐欺も増えてきてしまっています。そういった状況もあるので、若年層のうちから金融教育をやるというのも重要かなと思っております。この辺りも是非、進めていただければと思います。

最後に個人的な意見なのですが、テレビの経済番組を見ていますと、ここ数年で非常に取り上げられた新設の学校として、徳島県の神山まるごと高専があります。私もテレビ番組でしか見ていませんが、確かに非常に魅力的だなと思いました。高専ですので、県立高校とは学校の形態も異なりますし、神山まるごと高専は私立だと思いますのでかなり違うところがありますが、テレビを見る限りだと、建物がまずきれいで教室も個性的でイノベーションが進みそうな感じで、見ているだけで魅力があると感じました。そもそも情報発信力が非常に高いということも感じられて、魅力ある高校づくりにおいて真似できるところがあればそういうところも生かしていくと良いのかなと思いました。以上です。

依田高校改革統括監　ありがとうございました。続きまして、埼玉県高等学校ＰＴＡ連合会副会長　関根様、よろしくお願いいたします。

関根氏　よろしくお願いします。皆様のお話を聞かせていただいて、大変素晴らしいお話ばかりで、私がこの場で発言して良いのか少し不安になっておりますが、子供が今、高校３年生になりまして、上の子も同じ高校を卒業しておりますので、高校でのＰＴＡ本部役員８年目になります。その辺、保護者の視点、目線ということで選ばれたのかなと思いますので、保護者の考えとしてお話しできれば良いなと思っております。

上の子が高校生の頃は、まだコロナも無関係の時期でしたので、一つ一つの行事が先生も子供も一緒になって楽しんで参加する、全力で取り組むという時代でした。下

の子になったときに、中学では修学旅行も中止になってしまい行けず、高校の説明会も予約を取らないと人数制限で行けない時代となりました。やはり、コロナの影響をすごく受けたと思います。いろいろ高校のことを知らずに入学してしまう、情報を得ずに入ってしまうという話も聞いております。昨年度、南支部の支部長をやらせていただいた関係で、いろいろな高校のＰＴＡ会長からたくさん御意見をいただきまして、また生徒の声も先生方の声もたくさん聞かせていただきました。その中で、公立高校の倍率が年々下がっていると。最初にかなり厳しい数字が出てしまって校長先生がどうしようかと焦っている状況もありましたが、最終的にはなんとか定員に達したという状況です。保護者としては、私立の高校を選ぶ家庭が増えてきていると感じます。指定校推薦の数であったり、大学受験の考えたときに附属の高校に行っておこうかとか、大学受験で苦労しないように、親は行く高校をいろいろ考えています。また、子供に対しての手厚さ、教育的配慮、メンタルケアであったり、学習指導にしても夏期講習をきちんとやってくれるのはやはり私立だよねと、そういう声がたくさんある中で、私立を選ぶ家庭がすごく増えていると感じています。うちは上の子も下の子も公立高校を選びました。本当に良い学校で、伸び伸びさせていただきました。更に、厳しく押し付けるような教育はしない学校なので、個性を伸ばすというか、先生たちも個性がある子供たちにも公平にしてくれて、本当に良い学校でしたが、ここ数年、コロナの影響もあると思うのですが、働き方改革という言葉がとても前に出過ぎてしまっているように感じております。部活動指導員など、先生方の負担を減らすためにいろいろ考えてくださっていると思いますが、先生方が生徒のために使える時間が増えているはずなのに、自分の時間が増えていると捉えている先生方が、正直たくさんいるのではないかと思います。勉強だけしたいのであれば、塾などの別の場所でも良いわけですし、それは教員ではなく塾の講師から教われば良いことです。生徒の生活面やメンタル、人間関係なども含めて、面倒を見ていただけるのが先生だと考えておりますので、そうすると親としては、子供の未来を考えたときに、どうしても私立を選んでしまう傾向があるかなと思います。公立高校の中には、歴史が長い学校もあり、地元の高校、地域の高校として愛されている学校、地域に密着している学校がすごく多く、文化祭のときにバザーをやって地元の方が買いにきてくださったり、そういうところがすごく良いと思っていましたが、やはりコロナでバザーもなくなり、人と人が接する機会が減ってしまっているので、コミュニケーション能力が低下してしまい、それに伴って先生方のコミュニケーション能力もやはり低下していると正直思っております。先生たちの中にもすごく温度差があるので、本当に生徒のことを思って怒ってくださる先生もいらっしゃるし、遅くまで進路のことを考えてくださる先生もたくさんいる中で、挨拶もしない、時間になったらさっさと帰ってしまう先生もいます。保護者との関わりが減ってしまうので、もう少し環境と言いますか、コロナも５類に移行したので、文化祭にしても、もう少し保護者との関わりを増やす機会があっても良いかなと思っています。うちの子の高校は校長先生がすごく考えてくださっているので、進路関係のアドバイザーを呼んで、保護者と生徒で話を聞くという企画を考えてくださっています。授業公開をしても、高校生だとほとんどの保護者は来ないので、子供の学校生活に興味を持てるような講座やイベントがあって、それを保護者も一緒

に聞けるような取組が公立高校にもあっても良いと思いました。アンケート結果も含めて聞かせていただいきましたが、文系、理系に関わらず、外部との関わりをもう少し持って、公立高校ならではと言われるような、公立高校良いよねと言われるような高校をつくっていただきたいと思います。以上です。

依田高校改革統括監　ありがとうございます。それでは続きまして、埼玉県ＰＴＡ連合会副会長　船橋様、よろしくお願いいたします。

船橋氏　船橋と申します。よろしくお願いいたします。うちは、小・中・高の子供がおります。今年の４月にダブル入学をしたので、本当に、学校を選んだ立場です。高校選びの場面で気づいたことを申し上げますと、まず、保護者は子供が落ちない学校を選びたいと思います。先ほど倍率の話がありましたが、1.1 倍でも怖いです。落ちる可能性があるので。二次募集となるとすごく怖いので、絶対に入れる学校を選ぶということを感じます。あと、先ほど出た、通いやすい学校、立地ということで言うと、統合している一覧の中に傾向として表れていると思ったのですが、駅から遠い学校は統合になっている印象です。私の母校も統合して総合学科になりましたが、統合された学校は駅から 30 分以上歩かないといけないなど、駅から遠い学校が駅から近い学校と統合するという歴史があります。そういうところで言うと、遠いところは選びません。親御さんがすごく足を使わなければいけなくなりますし、秩父方面でも立地が大変な学校もあったりするので、やはり、人気がなくなると、学力が下がり偏差値が下がり、そして人気がなくなって二次募集の対象となってしまうというところを感じました。ではどうしていくのかというところで言うと、スクールバスを配置した学校は生き残っていると感じます。公立の高校でも私立と同じようにスクールバスが出ている学校があると、人気が回復するかなと感じたので、親の安心が子供の安心につながり、学校を選ぶ基準になっているのではないかなと思いました。特にうちの子は女の子なので、夜道を自転車で帰ったりとかは心配だなということがあったので、そこを感じます。

　私はＰＴＡを８年間、小学校の方でさせていただいておりますが、そこで感じたことを申し上げると、中学校の先生方については働き方改革ということを本当にすごく感じます。小学校、中学校では、時期によっては定時退勤の期間があると思います。そうすると電話もつながりません。部活もなくなります。そうなると、どんどん先生方に相談がしにくくなっているということを感じます。今回のテーマは魅力ある高校づくりということですが、この点は高校だけではないと感じます。というのも、中学校が高校を理解しないと、先生も推薦しません。高校選びも中学３年生からとなると、結構進路が決まっている生徒も多く、学校説明会もそこからとなっていると、すごく遅いと感じるので、中学２年生くらいから決めていかなければいけないかなと感じます。そうすると、中学３年生で学校総合体育大会を挟みますので、なかなかスタートが切れないというところもあるので、最近仕事で学校に出入りする機会があるのですが、高校が自分の学校を売りに来ていると感じます。うちの学校を選んでくださいという感じも見受けられるので、中学生に来てもらう、選択してもらうということで言うと、もう少し幅広くしていただくと、高校の魅力、うちの学校はこんな魅力があるので是非来てくださいねというふうにお互いが相思相愛になれるのではないかと思い

ます。うちの真ん中の子が中学１年生になりまして、高校受検が変わる学年になりますので、そういった観点も踏まえて、子供と話し合って決めていくのかなと思います。その中で、うちは専門学科を選びました。というのも、耳が不自由だからです。先ほどからオンラインというお話が出てきていますが、私はこれができないから、自分の力を手に入れて自ら進んでいくと子供が言ってくれたので、専門学科を進めました。どうしても授業だとハウリングが起きてしまったり、イヤホンを付けないといけません。そのときに、周りの声が聞こえなくなってしまうので、一概にオンラインが良いというわけではなく、ハイブリットの形を取っていただくことも本当に魅力的だと思います。一番下の子は支援級に通っています。支援級はなかなか道が狭いと思われることもありますが、子供が通う学校の支援学級はすごく魅力的な先生がそろっており、普通学級では学べないことをたくさんしてくださっています。一回、みんなは算数をしているけれども、このクラスは畑をやろうねということがありました。そういった、多様性という点も見出してくださっているので、そういったところが小・中・高ときちんとつながっていく、小・中でこういうことをやっているということを、高校でもきちんと受け入れてくれる体制を取ってくれると魅力につながっていくのではないかと思います。小学校、中学校、高校がそれぞれ単体ではなく、多様性と言いますか、開ける道を一緒に作っていけるような埼玉県であってほしいと思っております。今はグローバル社会、情報社会ですので、いろいろな情報が飛び交っていると思います。子供たちは高校見学の予約も自分のスマホで取ります。親が来るか来ないかも自分で選択します。去年はそんな状況でした。子供たちの力、自立したいという力をもっと信じてあげてほしいと感じました。大人がこうだと言うのではなく、アンケートでもありましたが、子供の声を聞き入れていただくと、もっと魅力的な高校ができるのではないかと感じました。参考になれば幸いです。以上です。

依田高校改革統括監　ありがとうございました。続きまして、久喜市教育委員会教育長柿沼様、よろしくお願いいたします。

柿沼氏　よろしくお願いします。県内 40 市で構成しております埼玉県都市教育長協議会の代表として出席させていただいております。久喜市ですが、令和５年度、1,190 名の中学生が卒業しまして、約 66%が県立学校に進学しております。市内には五つの県立高校がありますが、約 38%、40%近くが市内の５校に進学しているという市でございます。今は県内どこの学校でもそうですが、小・中学校では、指導の個別化、学習の個性化に配慮した、いわゆる個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させるよう努めています。特に令和３年度から本格的に始まりましたＧＩＧＡスクール構想も４年目になりまして、加速度的に授業の改善が進んでいます。これまで、チョークと黒板と教科書の３点セットとよく言われますが、これで授業をしていた時代には考えられない教育方法、資料にもありましたが教科横断的な学び、あるいは探究的な学び、STEAMS 化された学び、こういった学びが多くのところで実践されております。クラウド活用やＡＩ教材が普及しておりますので、そういうデータの活用も後押しをしていると思っております。それが先ほどのアンケートの結果の中にも、小・中学生が教科や科目を選ぶとか教科や科目を超えた学びをしたいとかオンラインの活用をしたいとか、あるいは身に付けたい力に主体的な学びや自ら考え判断する力を身に付けたいと

答えていたのも、その裏付けかなと思っております。県立高校でも、こういう方向に進んでいると思っておりますが、是非、県立高校には、今の授業の改善、授業の改革を更に進めていただいて、地域のリーダー的な役割を是非担っていただきたいと願っているところでございます。それから、あと二つほどお願いがあります。

一つは、今、不登校の生徒が大変急増しておりまして、対応が難しい状況にあります。不登校であっても、社会的な自立をするためには、やはり高校に進学することは一つの大きなステップだと思っております。本市でも、昨年度 1,190 名の中学校卒業生のうち、約５％が通信制の学校、あるいはフリースクールに進学しております。先ほど、角川ドワンゴ学園・Ｎ高等学校長の奥平様がお話しされておりましたが、やはりオンラインと対面といった、もっと自由な県立高校を増やしてほしいと思います。戸田翔陽高校がありますが、本市からは通うのがとても難しいので、こういう高校を是非、不登校の子供たちの将来のためにも、御検討いただければ有り難いと思っております。

もう一つは、中高一貫校について、埼玉県の場合は県立伊奈学園総合高校に中学校が設置されておりますが、他県の状況を見ると、中高一貫校が結構増設されている状況を拝見します。是非、この生徒減少という中で、単に高校を再編、統廃合するということではなく、中高一貫校を増設することによって、違う意味での地域の活性化も含めて、あるいは地域の子供たちのためにも、検討いただけると有り難いと思います。近くに通えるところに中高一貫校があるということは、いろいろな意味で、多様性への対応の意味でも、必要ではないかと考えているところです。いろいろお願いばかりではございますが、是非御検討いただいて、魅力ある県立高校づくりの一環にしていただければ幸いでございます。以上です。

依田高校改革統括監　ありがとうございます。続きまして、所沢市立所沢中学校長　江原様、よろしくお願いいたします。

江原氏　江原と申します。どうぞよろしくお願いいたします。中学校長会代表として参加させていただいております。今、いろいろなお話が出ましたが、魅力ある県立高校づくりということで、送る側に一番近い場所にいますので、子供たちの声や保護者の声という形でお話ができればと思っております。まず、資料を見させていただき、県立高校を取り巻く環境について、これから 14 年間で 14,000 人程度の高校生が減るということは、高校だと１校 1,000 人程度と考えると、14 校程度になると思います。令和 13 年からは毎年約 2,000 人ずつ数が減っていくというのは大変なことだと感じております。このように数が減っていく中で維持していくためには、小・中学校もそうですが、今は１学級の生徒数が 35 人などとなっておりますので、この辺、メスを入れていかなければならないかなと思っております。適正化を図りながら特色ある学校をつくっていくことが必要ではないかと考えております。また、学校の選び方では、総合学科や単位制の学校、また、昼夜選べる定時制のタイプなど様々な学校があり、すごく良いなと思うのですが、以前、私が進路指導をやっている頃は、いわゆる専門学科の人気が非常にあって、資格を取りたい、就職をしたいという希望が多かったのですが、現在は、将来の予測が困難なので、とりあえず大学進学。本校も毎年 250～260 人程度の３年生がおりますが、商業系、工業系の学校は近くにたくさんありますが、

昨年度も希望した生徒は５人程度でしたでしょうか。将来こんな仕事がしたいというのがあっても、専門学科に行くと大学に行けないというイメージがあるようで、そんなことないよと言っても、そう聞いていますと言われてしまいます。その辺りの意識を変えていかないと、難しいと感じます。これだけ普通科志望が増えている中で、本校は交通の便が非常に良いところにあるので、私立の傾向が非常に強いです。６割が公立、４割が私立、今は５割かもしれません。やはり私立の普通科を選ぶには、普通科の中でも、御承知のとおり、進学や総合進学、特別進学などたくさんあり、その先が明確なので、普通科の中でもここに行きたいということになります。そうすると公立高校の普通科は幅が広いので選ばない。やはり子供たちのニーズに応えていくシステムが必要なのかなと思っています。先ほど、中学３年では遅いというお話がありましたが、中学３年生で進路指導をしていると、３年生になった時点で既に私立の情報がすごく刷り込まれています。生徒は情報をたくさん持っています。そうすると、こんな良い学校があるよと言っても、もうここに決めていますということになるので、なかなか難しいと感じます。本校も中学１年生から進路学習を始めて、進路だよりも定期的に発行して情報発信しておりますが、今後、公立高校も選べる幅が広がってくると良いなと思います。危惧しているのは、中学校の教員も若くなってきています。本校では、３年生７学級あるうち、半分以上が５年未満の教員です。２人は初めて３年生の担任をするということで、恐らく公立、私立については自分の経験でしか知らないと思います。私が教諭だった頃と違い、情報共有をする場が非常に少なくなっており、教員は自分でネットで調べて進路指導しています。それは子供でもできる、同じことを子供もやっているのだから意味ないよと言っています。ではどこで情報を得れば良いのでしょうか。それもなかなか忙しいので、進路指導主事と一対一で話をするよりも、いろいろな意見を交換しないとだめなので、そういう場を作っていく。学校の中でもそうですが、県立高校もがんばっていて、例えば昨年、飯能高校と飯能南高校が統合して、進学を重視した地域と協働する学校というコンセプトで新しい学校になりましたが、保護者は全く知りませんでした。先ほどあったように、不便なところにある学校で生徒が少なくなっていったという感覚なので、そういう情報が市教委から降りてきて、学校の中で共有しているのですが、そういったところが足りていないなと思っています。

　また、別の資料で、不登校の生徒が５年で倍になっているということですので、こちらの方にも応えていくということが課題なのではないかと思います。私も校長として３年生とは全員と面談をするのですが、不登校の生徒もこの面談には必ず来ます。教室に入れない子供も、学び直しをしたいから高校から頑張ると。また、外国籍の生徒もそうですし、発達に課題を抱えている生徒もそうです。この学び直しという意欲に応える体制を公立高校でも考えていただきたいと思います。サポート校や通信制に進んでいく生徒が多いですが、現状はみんな私立に行きますので、経済的には大変かなと思っています。こういった子供や保護者の声を踏まえていくことが必要なのではないかと思います。アンケートでも、高校選びでは通学の便利さや設置されている学科など、項目にあるものから選びますので、こういう結果になるのでしょうが、フリーでアンケートに答えさせると、子供たちはまず部活動で選びます。部活動や学校行

事がさかんな学校、校風が自由な学校、その次に大学進学の実績などになります。コロナ禍を経験して、今しかできないことをやりたいという希望が子供たちにもあるので、またこんなふうになって止まってしまったら子供たちには良いことがないので、今できることを十分にやりたい、そしてその先に大学を目指したいという考えがあるように感じます。子供たちが夢を持たない、将来なりたい職業が余り明確になっていないという話がありますが、これだけ社会が不透明なのでそれも分かりますが、そうすると、子供たちは高校に行って自分の良さを見つけたり、自分の可能性を発揮したりということを考えています。そうすると高校の方では、様々な体験や幅広い学びが必要になってくるという気がしています。保護者の思いとしては、利便性の高い学校という思いがありますので、私立ですと遠くてもスクールバスがあるので、これもやはり県立としても考えていかなければならないのではないかと思います。私立との大きな違いは学費だと思いますが、保護者の声としては、県立に行って塾に通わせることを考えると、高くはないということです。家に帰ってから塾に通うよりも、学校の中で面倒を見てくれるのであれば、それは全然苦にならないといった声も聞きます。そこを考えると、進路指導が公立は弱いと思われてしまっているのかなということもあるので、決して弱くはないので、広報、ＰＲが大事だと思います。繰り返しになりますが、特別な支援を必要としている保護者や生徒の声に応える、不登校生徒の学習支援、学び直しをサポートするというところが課題になってくるのではないかと思います。

　コロナ禍を経験して、保護者は、１日も早く進路を決めたいという心理があるように思います。コロナ禍が明けてこの状況は変わるのかもしれませんが、公立の入試は休んでしまうと他になくなってしまうので、いち早く進路が決まるなら私立で良いですといった声もありました。そういう状況がここ２、３年続いているので、そういった情報も共有させていただきました。

依田高校改革統括監　ありがとうございました。それでは続きまして、県立越ヶ谷高等学校長　池田様、よろしくお願いいたします。

池田氏　県立越ヶ谷高校で校長をしております池田です。どうぞよろしくお願いいたします。公立高校の校長が３人おりますが、立場としては、進学重視型単位制の全日制と、先ほど話題にありましたように外国籍が１割以上在籍している定時制の全定併置校でございます。資料にある 18 校ある定時制のうちの一つです。そういった高校の校長でございます。先ほどからいろいろなアドバイザーの方のお話をお伺いしておりましたが、私としては、保護者、ＰＴＡのお二方のお話をお伺いして、今日にでも学校に持ち帰って、こんなことを言われていますと先生方にお伝えしたいと思っているところではございます。また、中学校の校長先生からいろいろなアドバイスをいただいて、それに一つ一つお答えしたくなってしまうところですが、今の立場として、私も高校教育に携わって 38 年目になりましたという観点から、体感としての現場感覚をお話しできればと考えております。

　まず、久喜市の教育長様からもありましたが、私が教員になった頃はまだ久喜北陽高校が新設されるなど、高校が少し増えてきた時代でした。要は、私が 40 年ほどで感じたことは、多様性や包摂性、デジタル化、不確実性の問題、グローバル化の話があ

りましたが、２点でございます。１点目は少子化。２点目は、経済活動や社会情勢によって、公立高校も含めて、高校の在り方が変わってしまうということです。その２点を体感しております。先ほど申し上げたとおり、子供たちが少なくなってきているという中で、全ての子供たちが、「人の宝」という意味での人財とも言うべきことですが、つまりは、丁寧に育てないといけないと思うようなことが体感されます。ですから、教員になりたての頃は、私学に負けないぞとか公立はこういう良いところがあるといったところで、お互い切磋琢磨するといった状況でしたが、今は子供の数が少ないので、どちらかと言うと共存・共栄していきましょう、丁寧に育てていきましょうという感覚になったと思います。

経済的な状況で言えば、私が教員になってしばらくしてバブル経済と呼ばれる状況になり、初めて、自分が学生時代には聞いたこともありませんでしたが、ＭＡＲＣＨなどという言葉が出てきました。それまでは国公立、言ってしまえば東京大学に絶対に進みたいと思っているお子さんがいたように思っているのですが、スマートにＭＡＲＣＨクラスに行って経済学を学んで公認会計士や税理士の資格を取ったらスペシャリストとして何か役に立ちますよと言われていた時代があったように覚えています。経済が右肩上がりのときにはそういった感覚があったのですが、決定的な出来事としては 2008 年のリーマンショックでしょうか。その頃には国公立に戻り、公立高校回帰の社会情勢があったと。つまり、経済状況によってその流れが変わってくるのではないかと思っていて、高校という場所が単に教育機関として独立した存在ということではなく、社会を映す一つの装置なのではないかと感じたところです。

現在は、経済的に富裕層と言われる方々と困窮された方々と二極化しているという話がありますが、学校の文化としても、今、学力層がフタコブラクダのように、非常に優秀な層と、なかなか大変な、学力に対して辛いと思っているような層の二極化しているという状況があると思っています。それが全てリンクしているかどうかは分かりませんが、富裕層の御家庭は教育費にふんだんにつぎ込むことができて、貧困の層はそういったことができないということもあります。この会議の目的は、「公教育はどのようにあるべきか」という話だと思っているので、公教育としては、そういった御家庭に、廉価で上質な教育をしていくということで、そういった御家庭に向き合っていくことも使命なのではないかと考えています。そういった意味では、公教育にも一定の、国公立大学などに対する学力の生徒を預かる必要もあるのではないかと思っています。また、公教育として、学び直しといったものも預かる必要性があるのではないかと思っています。古い話で恐縮ですが、私が高校生くらいで教職を目指したのは、長野県の篠ノ井旭高校というところが全国の不登校生徒を預かって、勇躍有名になった、そして、教育は死なずという著書を出された校長先生もいらっしゃいましたが、また、北星余市高校といった私立高校が全国の不登校生徒を預かるということがありました。ただ、私立でそういったことがだんだん有名になってくると、進学を期待されたりスポーツに特化したりといったこともありまして、不登校などの部分を担うのが、公立としては、先ほどもありましたがパレットスクールなどになるのかなと、そういったところがカバーしていくのかなと思っております。経済が疲弊するとそういったことが出てきて、またそういった高校が公立高校でも人気が出てくると、進学を

期待されていくということもあって、その立ち位置を常に検証しながら、公立高校がその存在価値を高められれば良いと思っております。

　人手不足が叫ばれており、学校の教員も足りないということで、本校は単位制なので、理科と社会については、いろいろな専門の先生がいて、いろいろな科目を選択できるという形にしたいのですが、実は教員不足で足りないということもあります。教育課程とは違うお話ですが、本校は１学年８クラス規模の学校ですが、この間、遠足を実施するということで、遠足のバスの運転手さんが足りないということがありました。遠足当日まで、バスが配車できるのかということを旅行会社と考えながら、結果的には足りたわけですが、そういったことも、学校行事をする上では、今までの管理職はそういったことを心配することはなかったと思います。今の時代は人手不足ということです。恐らくは近い将来、もしかすると、私よりも少し年齢が高く非常に能力が高い、教え方がうまかった先生方がいらっしゃいますから、そういった先生方の授業をアーカイブ化してそれを流していくようなデジタルコンテンツも出てくるのかということも考えています。人材不足や社会情勢など、そういったことを考えながら高校教育、公教育の在り方を論じなければいけないと。ついては、経済界、埼玉県には、埼玉りそな銀行などがあり、シンクタンクがございます。そういったところの御教示を受けながら、公教育の在り方について、アドバイザー会議に参画してまいりたいと考えております。以上です。

依田高校改革統括監　ありがとうございます。続きまして、秩父農工科学高等学校長　服部様、よろしくお願いいたします。

服部氏　よろしくお願いいたします。秩父にある専門高校、職業に関する専門学科を置いている全日制と、定時制がございます。それから、日曜日は大宮中央高校通信制のスクーリングをやっています。そういったことで、公立高校の役割というお話が先ほどありましたが、場所としての役割。秩父地域は本当に少子化・高齢化が進んでいます。そういった中で、場所として、ある意味、この学校にしか通えないという子供も生徒の中にいます。恐らく県立高校の中で、バイク専用の駐輪場がある学校は珍しいと思います。定時制の生徒が自動車で来ます。所沢や越谷の学校とは違う学校ですが、山奥の学校でも、充実したコンテンツを提供をということで、いろいろなことにチャレンジしております。国のＤＸハイスクールにも手を上げ、専門教育の分野では、大学と専門学校とつないで実習に協力いただくということにもチャレンジしております。しかしながら、子供たちのニーズは、意外と、大人が望むニーズとは違うところに目が向いているようで、先ほど事務局から説明があった、生徒が進む進路の割合のグラフで、専門分野を学んでいる生徒たちの進学志向が高まっている状況は本校でも同じで、コロナ前までは６対４で就職する生徒の方が多かったのですが、今年の卒業生は５対５になっています。更に、地域の方たちからすごく厳しく言われるのですが、地元企業への就職を希望している生徒が減っています。以前は、６割が地元に就職していたのですが、それが今年の卒業生は５割を切ってしまいました。人手不足によって、就職をする生徒にとっては追い風になっているとは思いますが、場所としての役割の他に、地域の担い手、人材育成という意味合いが本校でも非常に大きいです。そういった地域の期待に応えるべく、どのような教育を提供していけば良いのか、日々考え

ているところです。以上です。

依田高校改革統括監　ありがとうございます。それでは、県立狭山緑陽高等学校長　岩田様、よろしくお願いいたします。

岩田氏　よろしくお願いいたします。本校は、昼夜２部制の総合学科単位制でございます。定時制ですが、３年間で卒業もできますし、４年目に進む生徒もいます。今年度の４年生は４人です。大宮中央高校のスクーリングも日曜日に行っております。多様な学びで夢の実現へということで、就職から専門、大学、国公立を目指している生徒もおります。もちろん外国籍の生徒もおりますので、日本語支援員を配置いただいているところですが、なかなか毎日というわけにはいかないので、そこがもう少し予算化されると有り難いと思っております。教員不足ということもありますので、先生になりたいという人は先生に憧れてという人が多いので、今年は先生方の授業を受けて、先生になりたいという生徒がいると良いですねということでお声がけしているところです。今も昔も、高校で学び直したいといって、新たな目標を持ってがんばっている生徒はたくさんおります。本校は 10 時から始まり、生徒が魅力ある授業を受けられるように、たくさんの専門の選択科目もあり、通学も便利ですが、生徒募集に苦心しているところです。いろいろなお話を聞いて、また学校に持ち帰って、新たな取組等を検討していこうと思います。貴重な御意見をお聞き出来て、本当にありがとうございました。以上です。

依田高校改革統括監　ありがとうございました。それでは、最後になりました。県立幸手桜高等学校教諭　川邉様、よろしくお願いいたします。

川邉氏　よろしくお願いいたします。幸手桜高等学校教諭の川邉と申します。商業科の教員です。本校は 12 年目となりますが、ちょうど 12 年前、本校は幸手商業高校と幸手高校が統合して幸手桜高校としてスタートしました。前任校は久喜北陽高校で、総合学科の学校を渡り歩いております。幸手商業高校の校舎に幸手桜高校が設置されましたが、地元の方、幸手商業高校の卒業生の方によくお会いするのですが、幸手市は市役所で働く人も企業で働く人も幸手商業の卒業生の方が多く、そういったところとはインターンシップでお世話になったりするのですが、12 年前に幸手桜高校がスタートしたときには、多くの卒業生の方から、どうしてなくなってしまったのか、どうして名前が変わってしまったのかという切実な声をいただきました。それは真摯に受け止めて、我々ががんばっていくしかない、がんばっているところを評価していただくしかないということで 12 年間やってきて、最近では、幸手商業高校よりも幸手桜高校の名前の方が定着してきました。インターンシップ先や市役所にお伺いしても、いつも幸手桜の生徒はよくやってくれている、ありがとうというお声をいただけるようになりました。学校の統合の際には、卒業生の方にとってはいろいろな思いがあるということを体感しました。卒業生の方のことも考えながら、新校の教職員はがんばってやっていかなければならないと日々感じながら仕事をしております。

　先ほど、教職員の働き方改革で電話がつながらない、17 時ぴったりでというお話がありましたが、とてもよく分かります。私も高校３年生の息子がおりますので、息子が通っている高校では、本当に 17 時になったら電話はつながりません。本校では、留守電機能は付けていますが、可能な限り対応しようとしております。これは教職員み

んなで考えて、やはり遅くまで仕事をされている保護者の方などいろいろな御家庭がありますので、10 回コールまでに出られるのであれば、いる職員で出ようということでやっております。もちろん早く帰るときは早く帰っておりますので、そういった形で保護者の方にも寄り添いながらやっていかなければ、県立高校もなかなか難しいと感じております。また、上の娘が私立の大学付属の高校にお世話になりましたが、ちょうどそれがコロナの初年度でした。下の子は県立高校でお世話になっており、自分が県立高校の職員として働きながら、娘は私立にお世話になっている中で、いろいろと比べる機会がすごく多く、コロナ初年度のオンライン等々の対応のときに、やはり私立との力の差をすごく痛感しました。では、どうやったら県立高校ががんばっていけるのか、県立高校の方に向いてくれるのか、興味を持っていただけるかということを、日々考えながら仕事をするようになりました。なかなか難しいことではありますが、一番感じたことは、設備の面で、やはり私立はお金をかけているなと。県立では、設備にお金を使うことはなかなか難しいところがあるので、例えばオンラインの環境もそうですが、こういう環境が欲しいといってもなかなかすぐには予算が下りなかったりという状況の中で、限られた予算の範囲内でどこまでやれるのかということで、我々現場の教員はやっています。そんな中でも、本校では、保護者の方に負担していただきながら一人一台タブレット端末を昨年度、導入しました。今年で２年目です。接続する台数が増えてくると、ネットワーク環境が不安定になって、もう少しアクセスポイントが欲しいというのが実際のところですが、そういった設備面の制限がある中でも、少しずつＩＣＴを使いながら新しい学びができないか考えております。本校にも不登校の生徒がいたり、フィリピンや中国から来た方で少し日本語が不自由な生徒もかなり在籍しております。そういった生徒への対応という面においても、ＩＣＴを上手く活用してやっていくこともできるんだということを、本日のお話を聞いて、現場に持ち帰り、やれることから一つ一つやっていきたいと思いました。魅力ある県立高校と思っていただけるように、我々も頑張っていこうと思っている次第です。以上です。

依田高校改革統括監　ありがとうございました。最後は少し急ぎ足になってしまい申し訳ございませんでした。これで、皆様から御意見をいただく時間を終了させていただきたいと思います。大変、示唆に富むお話を賜りまして、誠にありがとうございました。

6　欠席アドバイザーからの御意見

小栗貴弘氏

○　特色ある学びは大事だが、そこからこぼれてしまう子供たちをどう救っていくかというところも重要である。埼玉県は高校通級に力を入れていると思う。高校は、今は自校通級が基本だと思うが、小・中までは他校通級がメインだと思うし、巡回方式もある。他校通級や巡回方式が取り入れられると恩恵を受けられる子供たちが増えていくのではないかと思う。

○　特別支援学級から普通高校に入ってくる子供もいる。高等特別支援学校に落ちて定時制高校に入ってくる子供もいる。そうした現状から、定時制にこそ高校通級が必要

なのではないか。現状、埼玉県では高校通級が全日制にしかない。高等特別支援学校に合格した生徒は掛け算九九などの小学校の内容から丁寧に始まるが、高等特別支援学校に落ちて全日制や定時制に進学した生徒が一学期に因数分解をやるというねじれ現象が起きており、以前から気になっている。埼玉の高校通級は基本的に学習より対人関係（ソーシャルスキルトレーニングなど）がメインだが、学習面での支援も広がっていくと良いのではないか。埼玉県で通級指導を受けている高校生のほとんどは放課後などの課外で受けており、卒業単位外である。学習面での支援であれば、卒業単位に含まれる授業時間内の指導を希望する生徒もいるのではないか。

○　学習面での支援が大切な一方で、社会的に自立できるように、しっかりと社会性を育ててあげることも大切である。将来この子供たちが働く上でどんな力が必要か、対人関係も学力もそれを逆算して育ててあげるのが特別支援教育であるし、その先にあるのが社会でのインクルーシブであると思っている。

○　特別支援学校のセンター的機能が利用されると良い。そのためには、特別支援教育コーディネーターの専門性向上が課題である。高校の実情に合わせてコンサルテーションができたり、知能検査が実施できるコーディネーターが必要であり、行政にはそのための研修の機会が求められよう。また、センター的機能を使ってもらうためには、管理職の意識向上も大切である。

渡辺大輔氏

○　県の調査では、ＬＧＢＴＱの子供たちは約 3.3%、トランスジェンダーは約 0.5%、学校規模にもよるが、クラスに一人か二人は同性が好きな子がいる、学年に一人はトランスかもしれない子供がいる。少数ではあれ、居心地の良い学校というのが、これから重要になってくる。

○　トランスジェンダーの生徒への対応は、学校からすればすごく難しいと思う。子供や保護者が先生に相談しているケースかなり大きな一歩で、埼玉県はがんばっているなと思う。いろいろな不安がある中でも相談できているというのは良いことだと思う。

○　ＥＬＣＩ（エルシー、ethical, legal and social issues）という言葉がある。理系に進む人でも、倫理、法、社会的な課題を学ばないといけないということで、どちらかというと文系だが、人権や倫理といったものはどの領域でも土台になるものなので、そういったものが学校の中でしっかり学習できると良いと思う。

○　包括的な性教育について。性のことはいろいろな教科に散りばめられているが、それが何かぽつぽつとあって、しかも各教科の関連性が余りない、先生方が行き来できない状況。人権教育担当の先生が横ぐしを刺してくれるようなことになると、これってここにつながるんだとか、いろいろ広がる。数年かけてでもそういうシステムや研修が進むと良い。性というのは私たちにとってもっと楽しくて、ポジティブで、人権の問題なんだというような学びの実践を。

中村敏明氏

○　私立の広域通信制高校がすごく流行っている。いろいろなところで活躍する小・中学生が低年齢化しているという実態があり、世界で活躍する子供たちの低年齢化とい

うことを考えると、そういう子供たちの受け皿として通信制高校は非常に重要な位置にある。不登校でうまく学校に通えなかった子供たちもカバーできる。大宮中央高校の役割が変わってきたのではないかと思う。不登校の生徒や低年齢のうちからやることが決まっていてがんばっている生徒で時間的に毎日学校に通えない子供たちをどういうふうに取り入れていくのか。大宮中央高校の通信制の教育課程の在り方や受け入れの方針などに一つポイントがあると思う。

○　今度開校する新校はすごく良いと思う。国際科は、それぞれの地域にバランスよく散りばめられていて、もっと特色を出しても良いと思う。せっかく新校をつくるということで、アニメーションなども含め、特色がはっきり出るようにしていった方が良いのではないか。

○　日本語指導が必要な生徒は、低年齢化している。宮代町だと、英語圏ばかりではない。高校の中に、年齢に関係なく日本語を学べるプレスクールのような制度ができないかと思う。高校内にそういうものがあると、小さな自治体などは助かる。小・中学校段階でちゃんと日本語指導をやっておくことで、高校へのスムーズな接続につながる。県にそういうことができる施設がいくつかあると、市町村は助かると思う。

○　春日部特別支援学校の宮代分校は非常に良い感じ。子供たちも生き生きやっている。今、たくさんいる発達障害の子供たちの受け皿として、多少レベルが違う内容の中で、社会に貢献していくような訓練をしながら授業をやっていくというのは良いことだと思う。子供たちが社会に出たときに、存在感をしっかり持ってやっていくためには、宮代分校はとても良い役割をしていると考える。

○　中学生は普通科志向。中学校の段階でこういう方向に進みたいんだということを決めるのはすごく難しい。機械のことを学びたいといっても、それをいつやるのかとなったら、「大学に入ってからで良いよね」と多くの親もそういう考えを持っていると思う。普通科に行っている間にやりたいことが見つかったら、専門学校に行くということもある。一方、専門高校でも新しい生産システム、新しい技術は人気がある。工業高校でも、新しい学び、アドバンテージをしっかりＰＲしていくと良いと思う。

中川未来氏

○　教員が疲弊せずに生き生きと仕事ができることが大事だと思う。クラス、授業、部活動等、生徒と関わる部分よりも、それ以外の様々な雑務が増えてきてしまい、そちらに時間を取られてしまうことも多く、本来やるべき授業やクラスのことを一番に持ってこられない現状もある。教員が生き生きと仕事ができないと、魅力的な高校とは言えないと思う。

○　無から有は生まれない。前提は絶対に必要で、そこは疎かにしてはいけないと思っている。ある程度の基礎学力、読解力は必要。人と関わるときのコミュニケーション能力も含め、それが土台にある基礎的な力だと思う。それがあって初めて、有を生み出す、新たなものを生み出す、課題に気付いてその課題を解決していこうということができるのだと思う。探究、探究と言われるが、ゼロの状態では機能しない。しっかりとした土台、基礎的な知識があって、その上で課題研究や解のない問いに答えていくような力が身に付くと思う。

○　基礎的な部分ができてくると、自己肯定感も高まる。自分はできるんだという意識が生まれて、変容が生まれる。日本の子供たちは自己肯定感がすごく低く、何をやっても駄目だと思ってしまっている。小・中・高のどこかのタイミングでそれに対するケアができれば良いと思う。

○　教科横断的なものや先端的なものに触れられる機会が様々なところに散りばめられていると良い。それに触れてみて、やっぱりもう少し学ばないと、と思えば基礎の重要性に気付く。